

第9章 結 章

1. 福岡平野における先土器時代の様相

(1) 遺跡の立地と分布 (Fig. 39)

福岡平野は、北を博多湾、南を三郡山系と背振山系、東を月隈丘陵、西を油山から派生する丘陵によって囲まれ、約100km²の広さをもっている。福岡平野の東側には西流する多々良川を中心とした粕屋平野が、一方、西側には北流する室見川を中心とする早良平野が広がっている。

先土器時代の遺跡は、現在、福岡平野では中央部を北流する那珂川中流域の標高13m前後の丘陵に分布する群（Ⅰ群）、同河川の中流域の標高35m前後の丘陵に分布する群（Ⅱ群）と北流する樋井川の中流域の標高20m前後の丘陵に分布する群（Ⅲ群）、同河川の上流域との境目の標高55m前後の丘陵に分布する群（Ⅳ群）がある。また、多々良川中流域の標高10mから30mの丘陵部に分布する遺跡群をⅤ群、室見川中流域の標高30m前後の丘陵部に分布する遺跡群をⅥ群とする。

Ⅰ群の遺跡が分布する地域は、標高15mから10mの丘陵が屋根状をなし、北へいくにしたがって低くなるとともに、丘陵北端部は独立丘状をなしている。この地域では、本遺跡（井尻B遺跡）・諸岡遺跡・諸岡館址遺跡で先土器時代の包含層が検出されている。3遺跡での先土器時代遺物は、八女粘土層（阿蘇Ⅳ?）、鳥栖ローム層の上にある鳥栖ロームの再堆積層中（諸岡館址遺跡）、新时期上部ローム層上部のハード層中（諸岡遺跡）、その上にあるソフト層との間（諸岡遺跡・本遺跡）で出土している。諸岡館址遺跡は、ナイフ形石器文化期、本遺跡は細石刃文化期、諸岡遺跡は両文化期の遺跡である。他にナイフ形石器文化期の遺物が、採集および後時期の遺構から出土している遺跡として、那珂遺跡・那珂君休遺跡・板付遺跡・高畑遺跡・井相田C遺跡があり、細石刃文化期のものとしては板付遺跡・日佐遺跡がある。

Ⅱ群の遺跡が分布する地域は、標高30mから60mの開析谷をもつ台地が発達している。この地域では、野多目拈渡遺跡でナイフ形石器文化期、門田遺跡でナイフ形石器文化期・細石刃文化期の包含層が検出されている。門田遺跡では、下から上に阿蘇Ⅳ・砂礫層・淡褐色土層・淡茶褐色土層・白色粘土層・白色粘土混じり灰褐色粘土層（4層）・暗茶褐色ローム層（3層）と堆積しており、ナイフ形石器文化期の遺物は4層下部、細石刃文化期の遺物は4層上部から3層下部で出土している。他にナイフ形石器文化期の遺物が採集および後時期の遺構から出土している遺跡としては、赤井手遺跡・福岡女学院構内遺跡・弥永遺跡・柏田遺跡・深原遺跡・白水池畔遺跡・向谷北遺跡などがあり、細石刃文化期のものとしては、柏田遺跡・鳥ノ巣遺跡・ウトロ遺跡・天神山前遺跡などがある。

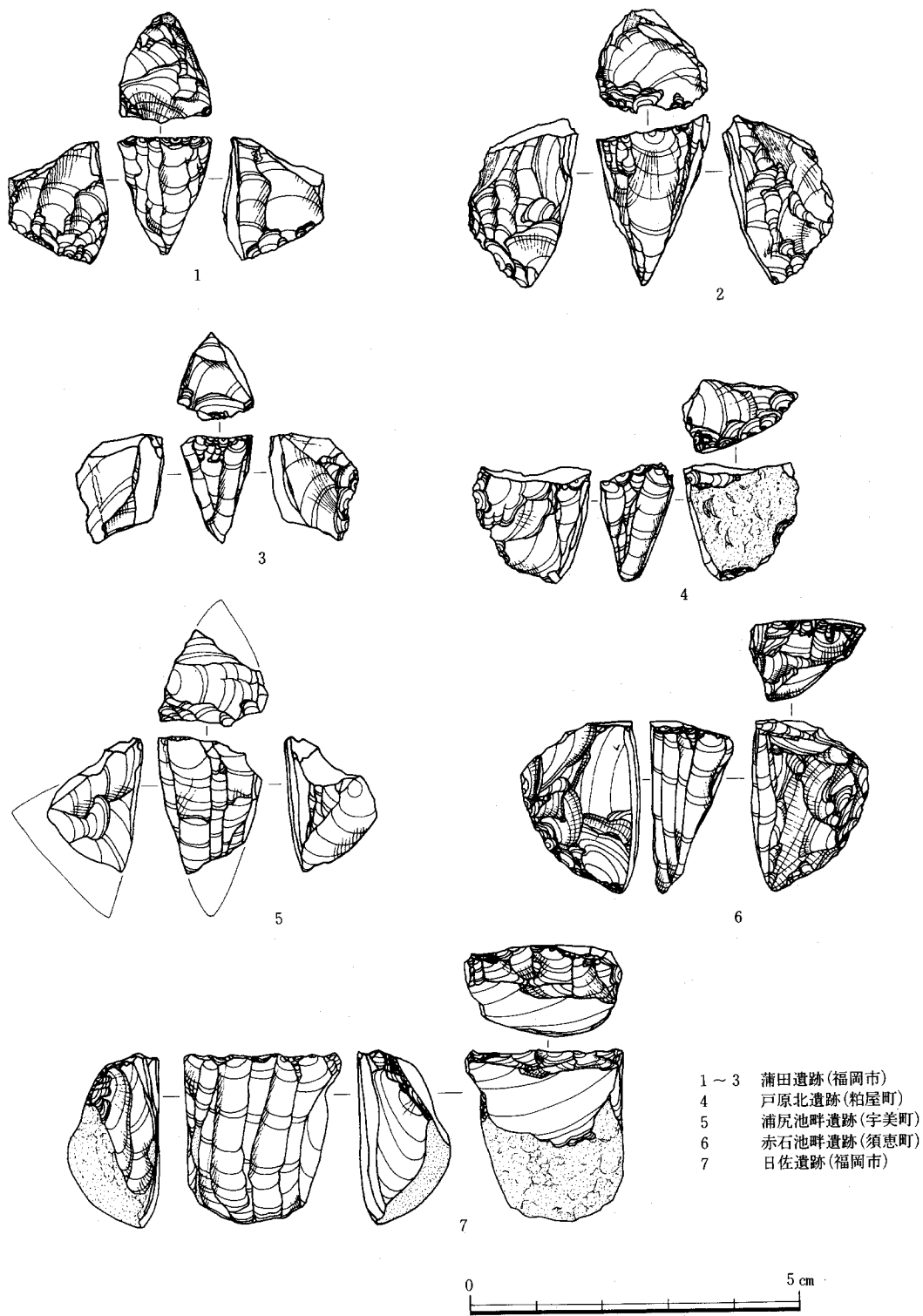


Fig. 40 各遺跡出土細石刃核実測図

Ⅲ群は、油山から北へ派生している標高10mから30mの丘陵部に分布する遺跡群である。この遺跡群地域では、有田遺跡で包含層が検出されている。この遺跡では、ナイフ形石器文化期の遺物が新期上部ローム層の上部で出土している。他にナイフ形石器文化期の遺物が採集および後時期の遺構から出土した遺跡として、神松寺遺跡・カルメル修道院内遺跡・五ヶ村池畔遺跡がある。

Ⅳ群の遺跡が分布する地域は、山塊部との境の丘陵部にあたり、柏原遺跡で包含層が検出されている。この遺跡は樋井川の段丘上に位置し、ナイフ形石器文化期・細石刃文化期の遺物が別地点で出土している。

Ⅴ群の遺跡群は標高10m前後の段丘上に位置する遺跡群と、標高30m以上の台地頂部に位置する遺跡群があり、今後、分けてとらえる必要があるかもしれないが、ここではⅤ群の遺跡として扱うことにする。この地域では蒲田遺跡の調査が行なわれており、細石刃文化期とナイフ形石器文化期の遺物が出土しているが、包含層を明確にするにいたっていない。他に採集および後時期の遺構から遺物が出土した遺跡として、戸原遺跡・部木遺跡・駕輿丁池畔遺跡・平原遺跡・乙植木遺跡・赤石池畔遺跡・浦尻池畔遺跡などがある。

Ⅵ群の遺跡が分布する地域は、扇状地が発達している。先土器時代の遺跡は、扇状地上や段丘上・独立丘上とさまざまである。この地域では、吉武遺跡群で細石刃文化期の包含層が検出されている。同遺跡群は標高30m前後の丘陵部に位置し、遺物は水成堆積層中に礫群を伴い、一定の分布をもって出土している。他にナイフ形石器文化期の遺物が採集および後時期の遺構から出土した遺跡として、高崎遺跡・羽根戸遺跡・馬立山遺跡などがあり、細石刃文化期のものとして、湯納遺跡・羽根戸遺跡・重留遺跡などがある。

(2) 細石刃文化

細石刃文化期は細石刃が製作・使用された時期を指し、日本列島でも多くの遺跡がある。だが、その製作過程は多様であり、残核である細石刃核に顕著にあらわれている。ここでは細石刃核に視点をあて、本遺跡をはじめとする福岡平野および周辺地域の細石刃文化についてみていくことにする。

細石刃核は残った形でみていくと、舟底または半舟底状をなすものと、円錐形や半円錐形をなすものがある。まず、細石刃核については残核の形によって、半円錐形細石核・舟底形細石核としたり(鎌木1965)、半円錐形細石刃核・円錐形細石刃核・半舟底形細石刃核・舟底形細石刃核とした(麻生1965)。また、細石刃製作の技法についても湧別技法(吉崎1961)・矢出川・休場遺跡出土細石刃製作(戸沢1964・杉原1965)・西海技法(麻生1965)・福井技法(芹沢1968・林1968)などが唱えられたり、紹介された。こうしたなかで、小林達雄は、「日本に於ける細石刃インダストリー」のなかで、細石刃製作を2つのシステム：AとBに大別してとらえた

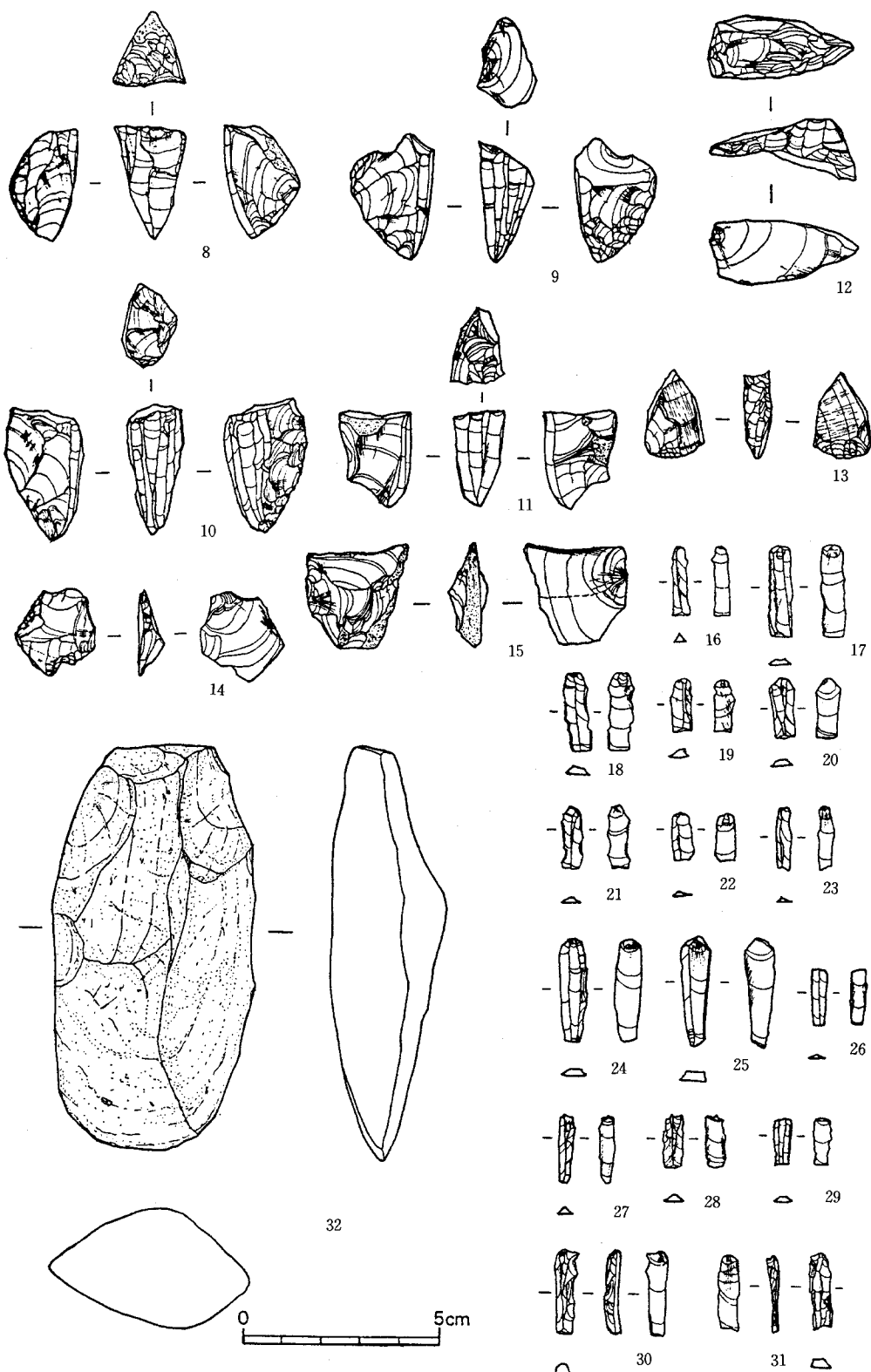


Fig. 41 門田遺跡出土石器実測図

(1970)。また、九州においては、橘昌信が「九州地方の細石器文化」のなか(1979)で、残核の形と細石刃製作技法を加味し、形態分類を行ない、Ⅰ類(福井型)・Ⅱ類(野岳型)・Ⅲ類(船野型)・Ⅳ類(畦原型)とした。現在、形態分類については、おおむね、麻生・小林・橘の分類方法がミックスされた形で使用されているといえよう。ここでは、形態分類については、小畑弘巳が、「九州の細石刃文化」のなか(1983)で使用した分類法をとることにする。A型は舟底形・クサビ形細石刃核と称されるものである。B型は半円錐形・円錐形(野岳型)と称されるものである。C型は橘のいう「船野型」、D型は「畦原型」である。小畑はA型をAI型とAII型に分けて、AI型を広義の湧別技法・AII型を福井型に対応させている。また、B型は素材の違い・石核調整の違いからBI・BII型に分けている。

福岡平野においては、AII型とB型が出土しており、C・D型の出土はない。本遺跡出土の細石刃核は、前述したように、角礫を素材として両側面を背縁より調整し、打面を作り、細石刃を剥出するものと、側面を下縁・甲板面より調整して打面を作り、細石刃を剥出しているものがある。したがって、BII型の細石刃核といえよう。門田遺跡では包含層からはAII型(Fig.41)が、谷部の攪乱層の中からはBI型・BII型も出土している。Ⅰ遺跡群では板付・諸岡遺跡でBI型・BII型が出土しており、日佐遺跡ではBI型が出土している。Ⅱ遺跡群ではAII型が、柏田・深原・鳥ノ巣・天神山前遺跡などで出土している。Ⅳ遺跡群ではAII型が出土している。Ⅴ・Ⅵ遺跡群ではAII型が各遺跡で出土している。AII型は、福井岩陰・泉福寺洞穴・上場遺跡・宇久島城ヶ岳遺跡で土器を共伴している。福岡平野および周辺地域では、柏原遺跡・吉武遺跡群・戸原遺跡出土の細石刃核が宇久島城ヶ岳遺跡のものと同類と考えられ、土器共伴の可能性はあるが、まだ共伴していない。なお、木下修は門田遺跡谷部の調査報告書の中で、同遺跡出土の爪形文土器をAII型細石刃核共伴ととらえている(1979)が、AII型共伴の土器(爪形文・隆起線文・豆粒文土器)は平底となる可能性が高く、文様が口縁部および胴上半部に集中するところから、門田遺跡出土の爪形文土器は、泉福寺洞穴・福井岩陰・上場遺跡出土の爪形文土器より新しく、細石刃とは共伴しないと考えられる。B型細石刃核は、本遺跡・板付遺跡・門田遺跡谷部・日佐遺跡・吉武遺跡群で出土しているのみである。AII型細石刃核と共伴関係がみられないのは、現時点では本遺跡のみである(Fig.40)。

次に遺物組成と遺物分布についてみていくことにする。本遺跡では細石刃のほかに、敲石・削器・彫器・使用痕のある剥片石器が出土し、門田遺跡(Fig.41)では、細石刃のほかに削器・磨製石斧・使用痕のある剥片石器が出土している。吉武遺跡群では、削器と使用痕のある剥片石器が出土している。本遺跡では径約10m前後の遺物集中が2ヶ所あり、小礫や炭化物が集中区と重なっている。門田遺跡・吉武遺跡群では本遺跡と同規模の遺物集中区がそれぞれ1ヶ所みられ、後者では礫群を伴っている。石材は、本遺跡は漆黒およびくすんだ黒曜石が主体をな

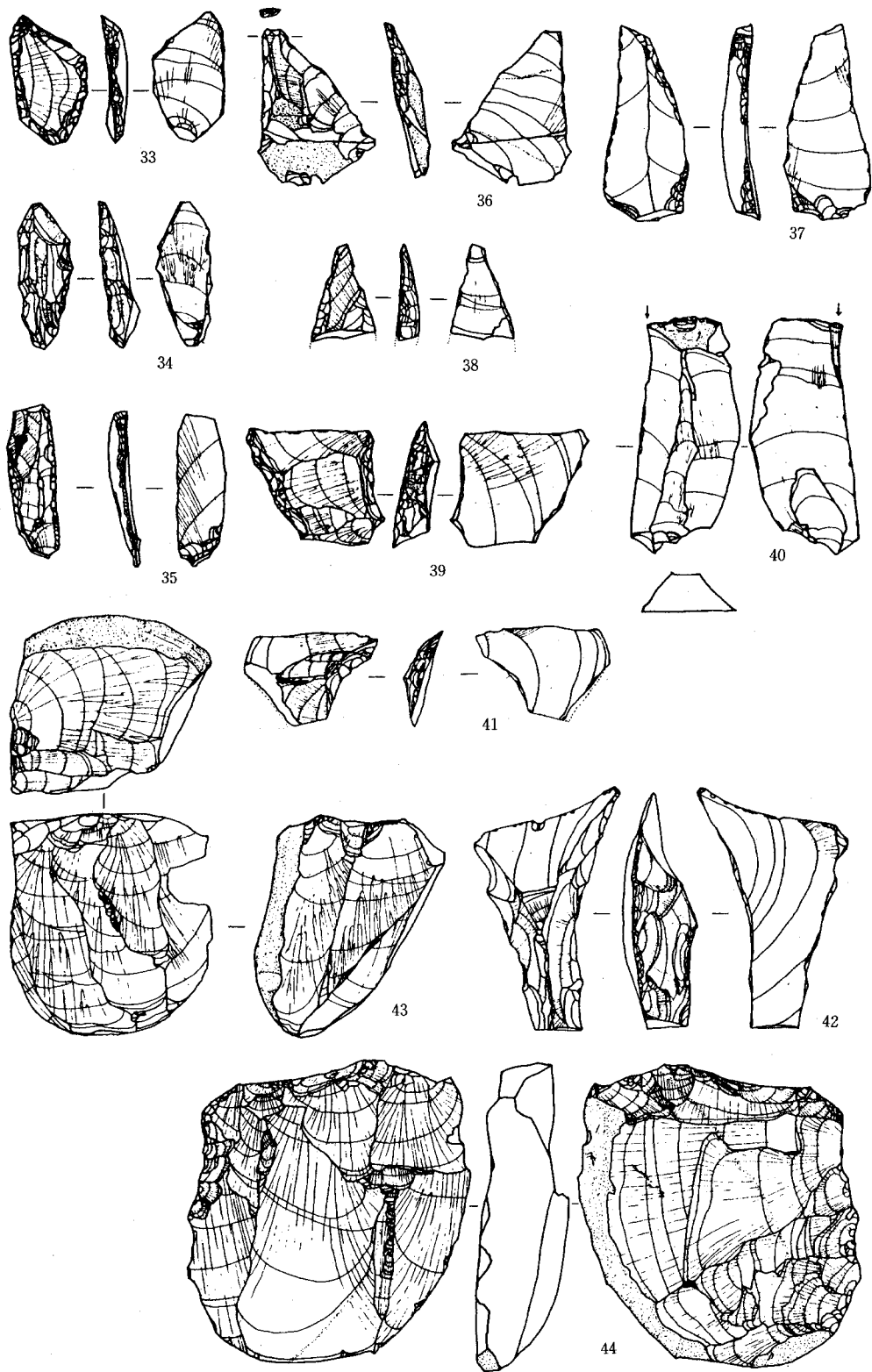


Fig. 42 諸岡遺跡出土石器実測図

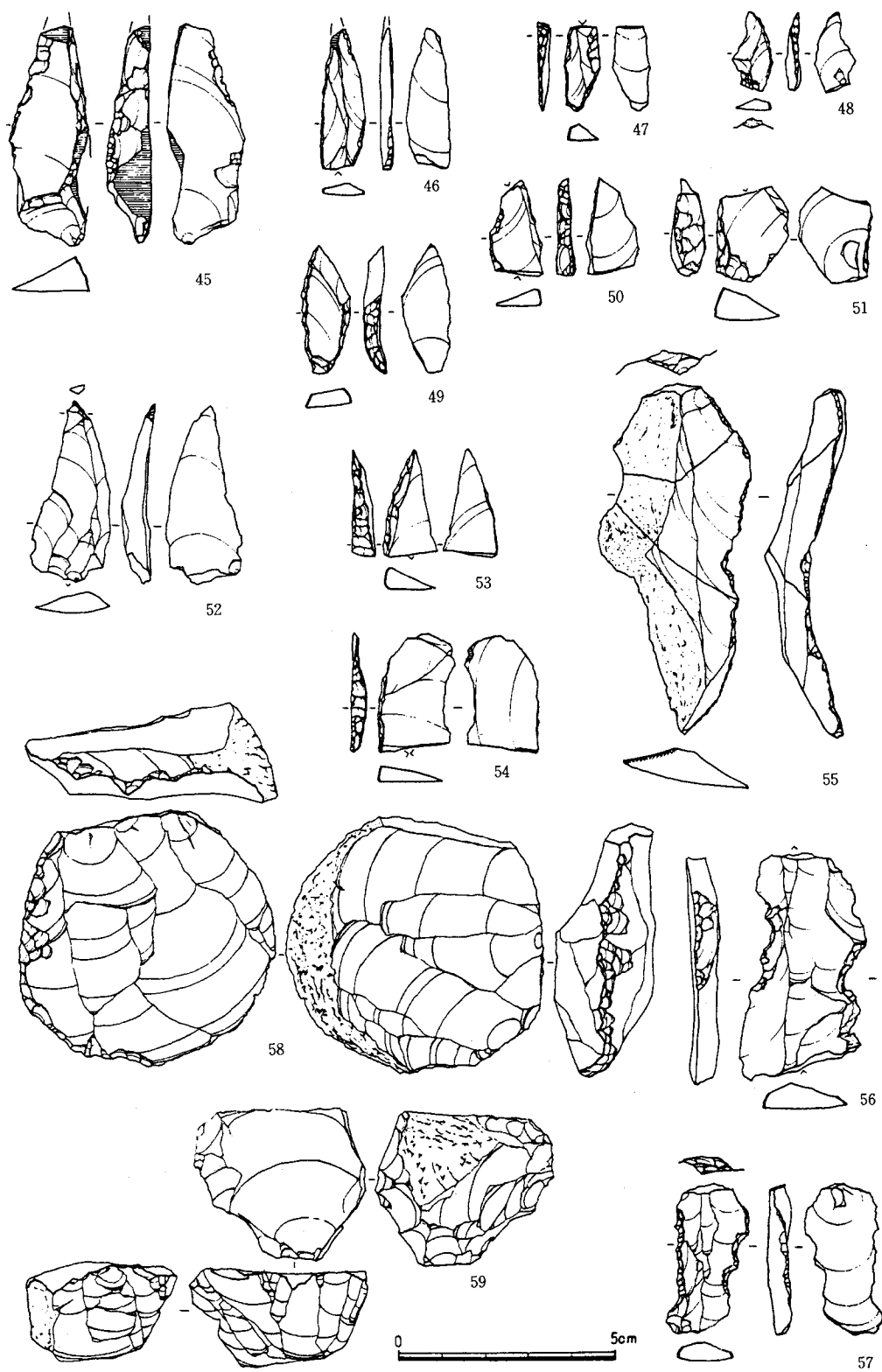


Fig. 43 諸岡館址遺跡出土石器実測図

し、古銅輝石安山岩・石英粗面岩などが使用されている。門田遺跡は磨製石斧を除いて、黒曜石が選ばれている。吉武遺跡群はさまざまな黒曜石（漆黒・乳白色など）・古銅輝石安山岩など種々の石材が用いられている。

(3) 福岡平野および周辺の先土器時代編年について (Fig. 44)

本遺跡は細石刃文化期の遺跡であるが、本遺跡をはじめとする本地域での検出石器群についてみていくことにする。なお、時期区分については、萩原博文（1980）および橘昌信・萩原博文（1983）の案にしたがった。

先土器時代を早期から終末期の6期に分けた。終末期は土器を共伴するものの、細石刃が石器組成の主体を占めていることから、先土器時代の残存形態として扱った。早期はナイフ形石器の初源期、前期は、縦長剥片を素材とした定形的なナイフ形石器に特徴づけられる時期で、前期まではAT前に位置づけられるものである。中期は横長・縦長剥片を素材としたナイフ形石器に特徴づけられる時期で、後期はナイフ形石器文化の最終段階であり、ナイフ形石器・百花台型台形石器などのナイフ形石器類の各器種が揃う時期である。晩期は、土器を共伴しない細石刃が石器組成の主体をなす時期である（山口1983）。

諸岡館址遺跡では、鳥栖ローム層中のクサリ礫を含んだ風化部から径約4 mと5 mに広がる地点をもってナイフ形石器文化期の遺物が出土した（Fig. 43）。同遺跡出土のナイフ形石器は2側縁加工のもの（46・47・49・50）、調整による1側縁をもつもの（45・48・51・53）基部調整のあるもの（52）、尖端部をもたないもの（54）があり、他に挟り入り石器（56）、削器（55・57）、搔器（58）、剥片石器、石核（59）、剥片、削片がある（杉山1984）。同遺跡出土の石器は、剥片剥離技法および石器組成が駒形遺跡C地点出土のものと共通していること、包含層が新期上部ロームの下位と対比できることから、AT下の石器群と考えられる。駒形遺跡C地点での石器出土層位、完成したナイフ形石器をもつことから前期に位置づけた。

中期に位置すると考えられる石器群は、本地域では包含層が検出されていないが、本遺跡では横長剥片を用いたナイフ形石器が出土しており、近くにこの時期の包含層があると考えられる。これを井尻BI期としておく。ほかに向谷北遺跡で、横長剥片（翼状剥片）と同剥片を用いたナイフ形石器が出土している。

後期に属する遺跡としては、諸岡遺跡（Fig. 42）・柏原遺跡・有田遺跡がある。諸岡遺跡は、2側縁加工（33～35・37）、1側縁加工（36）のナイフ形石器と台形石器（39・41）、台形様石器（42）、削器、搔器（44）、彫器（40）、石核（43）、剥片、削片などが出土している。有田遺跡は（Fig. 44）、2側縁加工のナイフ形石器、剥片尖頭器、台形様石器、削器が出土している。柏原遺跡では日の岳型台形石器が出土している。諸岡遺跡に剥片尖頭器がなく、有田遺跡に百花台型を含む台形石器はないが、ナイフ形石器、台形様石器は共通点が多い。萩原は諸岡遺跡

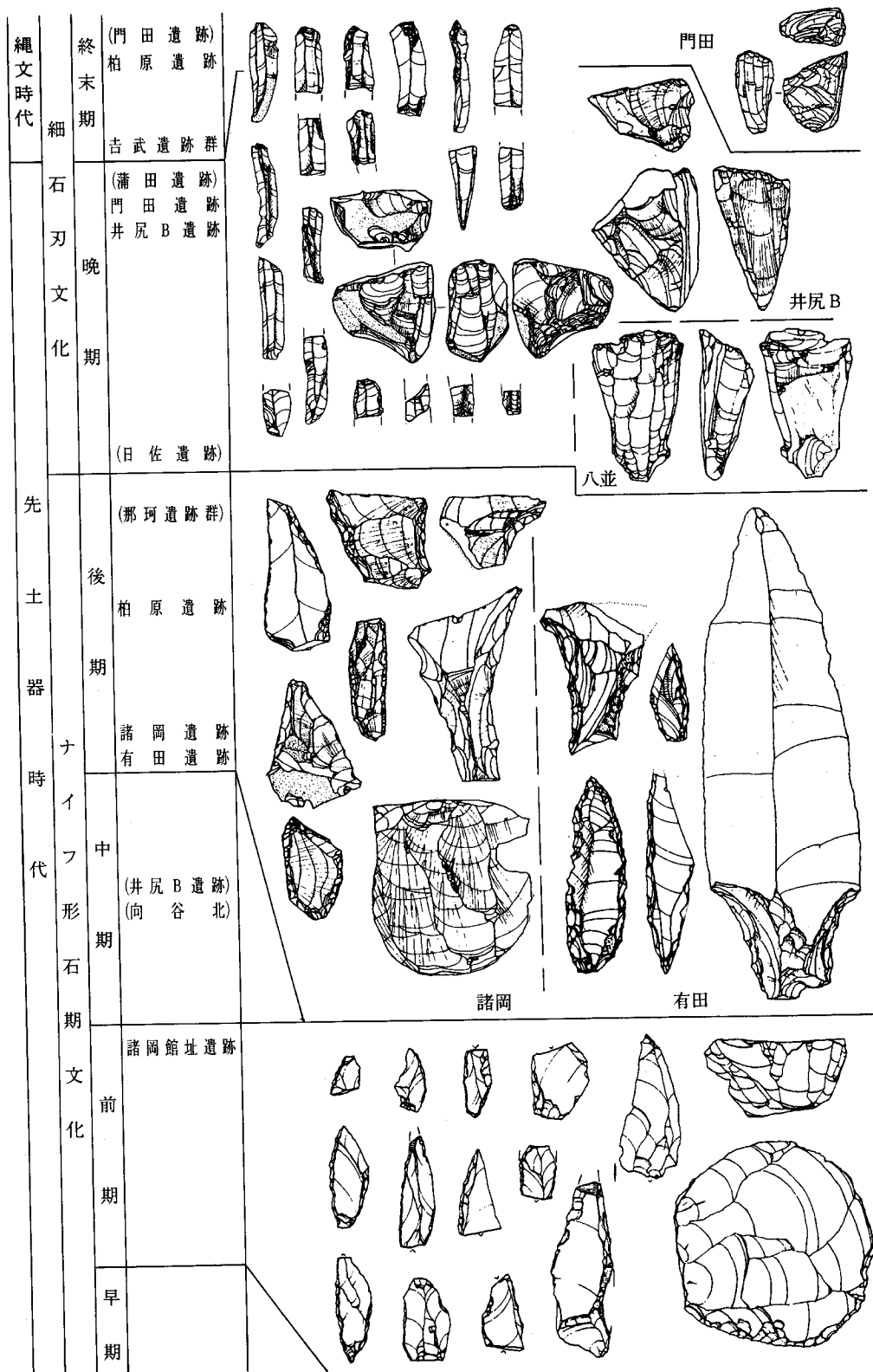


Fig. 44 福岡平野における先土器時代編年図

を中期に位置づけた(1983)が、百花台型台形石器(41)の存在は、後期に位置づけるべきであろう。有田遺跡は出土遺物が少なく、ここでは諸岡遺跡との比較から後期としたが、中期でAT直上に位置する可能性もある。柏原遺跡は、日の岳型台形石器の存在と西北九州での調査結果により後期に位置づけ、諸岡遺跡より後出のものとした。福岡平野および周辺の遺跡で採集されているナイフ形石器文化期の遺物は、ほとんどのものがこの時期に属するといえよう。

晩期の遺跡としては、本遺跡と門田遺跡がある。福井岩陰での調査を重視するならば、B型細石刃核による細石刃剥出が、A型細石刃核による細石刃剥出より先行すると考えられる。したがって本遺跡の出土石器群(井尻BII期)は門田遺跡に先行すると考えられる。AII型細石刃核は西海技法(福井型)による所産であるが、打面角が30°前後で、側面形が三角形をなし、横断面も三角形のものがある(いわゆる唐津周辺型である)。泉福寺洞穴では少ないものの、土器を共伴している。この細石刃核は定形化しており、天神山前遺跡などでみられ、包含層での単独出土はないが、AII型細石刃核と分けて考えていくべきであろう。時期的には福井型に先行する可能性が大であるといえる。

終末期の遺跡としては、前節で述した理由により柏原遺跡・吉武遺跡群・戸原遺跡がある。

以上、福岡平野および周辺の先土器時代の編年的位置づけを行なったが、包含層検出の遺跡も少なく、重層的な調査例としては門田遺跡(ナイフ形石器の実態がわからない)があるのみであり、今後の各遺跡群での資料の増加を待ちたい。また、ほぼ時期が確定できるのは諸岡館址遺跡・諸岡遺跡・井尻B遺跡(II期)・同遺跡(I期)・門田遺跡・吉武遺跡群であり、今後、この間を埋めていくこととなる。また、本稿は予察的なものであり、調査例を待って改訂していくことにする。

(Fig.40に使用した実測図中1～4は、小畑弘己氏の実測によるものである。)

参考・引用文献

- 麻生 優 1965「細石器文化」『日本の考古学Ⅰ』／鎌木義昌 1965「西日本の細石刃文化」『歴史教育』13-3／林 謙作 1970「福井洞穴における細石刃技術とその東南アジア・北アメリカにおける位置づけ(上)(下)」『考古学研究』64・66／小林達雄 1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16／橘 昌信 1979「九州地方の細石器文化」『駿台史学』47／萩原博文 1980「西南日本における旧石器時代石器群の様相」『考古学研究』26-4／木崎康弘 1981「九州地方の細石核」『熊本史学』55・56合併号／鎌木義昌・芹沢長介 1965「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3-1／木下 修 1976「門田遺跡・門田地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3 1976「門田遺跡」『日本の旧石器文化』3 1979「門田遺跡・谷地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』11／二宮忠司 1975「蒲田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集／平ノ内幸治 1986『乙植木古墳群Ⅱ』須恵町教育委員会／杉山富雄 1984「諸岡遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集／小畑弘己 1983「九州の細石刃文化」『物質文化』41／副島邦弘・山口譲治 1976「諸岡遺跡」『日本の旧石器文化』3／橘 昌信・萩原博文 1983「九州における火山灰層序と旧石器時代石器群」『第四紀研究』22-3